

富山県俳句連盟会報

令和元年度 総会及び俳句大会

松岡隆子先生の講演を聴く



(挨拶の中坪達哉会長)

令和元年度総会及び俳句大会は、風薫る六月一日(土)午後一時より北日本新聞ホールに於いて百七十余名の参加を得開催された。坂田直彦幹事司会のもと、中坪達哉会長は昨年のねんりんピックへの協力の謝辞を述べ、令和時代に入り、伝統を踏まえつつ新しい感覚を高め俳句文芸がつきに繋がる努力も必要と挨拶。総会の議長に岡田康裕理事を選出し、浅野義信事務局長が平成三十年度の事業

報告、収支決算報告を行い、大久保置沼監事が監査結果を報告し、これらを承認。さらに令和元年度事業計画案、収支予算案を中島廣志幹事より提案。その中で、規約第8条に名誉会員を置く事を追加。第10条、会費を令和二年四月一日より、年額三千元にすることも提案し、原案通り拍手で承認された。又役員改選年度に当たり中坪会長から現役員を再選した上で若土白羊、清田圭二両理事退任により宇波可津志氏を理事に、荒木かつを氏を幹事に就任を提案。又、但田長穂副会長退任により名誉会員に。それに伴い、浅野義信事務局長が副会長に就任し、中島廣志幹事が事務局長に就任すること等を提案し承認されて、全ての議案は可決。総会は滞りなく終了した。

続いて「某俳句会」代表、松岡隆子先生の記念講演に移る。演題は「身辺此事を詠むー岡本眸の俳句」で、日々の暮らしに詩を見出す作家であったことを熱弁。

令和元年七月一日発行
富山市委住町二一四
〒930-0094 電話(076)495-1855
振替番号 金沢 五一一七二〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

富山県俳句連盟
夏季吟行会(予告)
日時 七月十四日(日)午後一時より
会場 富山県民共生センター
サンフォルテ
富山市湊入船町六一七
TEL(076)433-4500
(環水公園・富石運河・中島開闢
富山県美術館等)
講師 梶井連会長 中坪達哉先生
締切 十一時三十分厳守
会費 二句出句 千円
交通 富山駅北口より徒歩十分

合同句集(第四十四集)
原稿募集
句集を次のとおり刊行いたします。
同封の原稿用紙により全員ござってご
応募ください。

○作品数 十五句(平成三十年七月か
ら令和元年六月までの自選句)

○記載要領 所定の原稿用紙に姓号、
(ふりがな) 作品(春夏秋冬の順が望
ましい) 本姓名、生年月日、郵便番
号、住所、電話番号、所属結社また
は句会名を記載する。希望者は住所
等の未掲載も可。

かなづかいには新旧混用せず何れかに
必ず○を付けること。

○締切 七月二十七日 必着厳守。

○出句料 三千元(一冊進呈)
同封の振替用紙で原稿送付と同時に
郵便局へ払い込むこと。

○送付先 〒935-0005
水見市栄町一〇一六
坂田直彦方
富山県俳句連盟合同句集係宛

○刊行予定 十月

富山県芸術祭主催
富山県民芸術文化祭参加
富山県俳句連盟秋季俳句大会(予告)
講師 北日本新聞社
編集局次長・文化部長
大割 範 孝先生
日時 十月五日(土)午後一時
会場 北日本新聞ホール
※第一回題の讃歌「葉句のテーマ」山について全般

春季俳句大会作品抄

松岡隆子先生 特選句

啓蟄の土になじまず鎌の先
満目の花菜一氣に鋤き込まれ
春愁の千の折鶴嘴つぐみ
朧夜の廻り階段消えてゆく
絵手紙の雛を飾りて老の坂

連盟選者特選句

義 信選 海苔弁に昭和の匂ひありにけり 新田 義博
順 子選 ランドセルに御守り付けて春よ来い 島竹 渥子
冬 青選 晩節は句に生かさるゝ桃の花 浜谷 栄子
英 子選 正解を探す生活や畑を打つ 北村加代子
玲 子選 新元号校の舟に乗って来る 若林 昌子
康 裕選 見守りの犬を撫で行く卒業生 二俣れい子
置 箔選 獣らに聞かすラジオや耕せり 石田 英子
こつき選 泣くほどに笑ひし法話あたたかし 杉本 恵子
久 惠選 初蝶来向ふから友来るやうに 漁 俊久
城 子選 春の日へかざす傘寿の生命線 石田 英子
ゆづ子選 花は葉に時の早きを口口に 平譚 宏修
弥 生選 爪を切る母の手温し柔らかし 渡辺 啓子
富美子選 ふくらんで届く封書や鳥の恋 石田阿畏子
美智子選 子らは手に頬に春野を持ち帰り 木谷 美以
洋 子選 日溜まりのまだ半眼の初蛙 青木 恭子
直 彦選 香眞師の子のひとり吐き出すしゃぼん玉 篠井 恵子
重 之選 春光をたつぷりなめる赤坊かな 狩谷 笑子
一 子選 ただいまの声二階まで一年生 島山 美苗
吉 章選 「入格」を顔いっぱいバスを待つ 高井 富子
桂 子選 陽炎をただただ追ひて初マラソン 長谷田泰男

恵 子選 誰からも声かけられて耕せり 八尾とおる
昭 夫選 水温むさかな食堂開店す 川上 美佐
眞知子選 しばらくは耳鳴り忘れ初音かな 篠原 成一
寿 山選 泣くほどに笑ひし法話あたたかし 杉本 恵子
三 久選 春昼やアールグレイへ五分計 酒井千枝子
廣 志選 応援旗引き継ぐエール初つばめ 跡治 順子
達 哉選 工事場の湯吞ちくはく春の雲 俵田美恵子
三津夫選 茶を点てる心しづめて春障子 山本 正子
睦 子選 平成の大団円や名残り雪 船平 晩秋
美知子選 縄張りにガスボンベ立て桜二分 五箇 洋子
多佳子選 新元号聞く耕しの手をとめて 大坪沙智子
栄 子選 新元号にはじまる未来風光る 小森登美子
幸 子選 残雪の立山褒める京言葉 金山 千鳥
千鶴子選 強がりの胸かも知れず春の鴨 島田おたか
純 子選 気がつけば皆散りぢりや雛あられ 濱元 旭子
稔 選 あまりある光け待春の母帰る 寺田 恭子
とある選 「入格」を顔いっぱいバスを待つ 高井 富子
白 羊選 「入格」を顔いっぱいバスを待つ 高井 富子

◇入賞句

天位⑧ ケアホームとなりし母校や鳥雲に 石黒 順子
地位⑧ 啓蟄や一行だけの処方箋 谷井 京子
人位⑦ 春愁の千の折鶴嘴つぐみ 室井千鶴子
4位⑦ ただいまの声二階まで一年生 島山 美苗
⑦ 春光をすくひて野良着繕へり 角田 睦子
⑦ 突堤の逃げどころなく陽炎へる 長沼三津夫
⑦ 誰からも声かけられて耕せり 八尾とおる
⑥ 児に飾り児に触れさせぬ立雛 但田 長穂
⑥ 折返す過疎のバス停山ざくら 大久保置箔
⑥ 桃生けて閉店の日の客送る 堀 真智子
⑥ 工事場の湯吞ちくはく春の雲 俵田美恵子

富山県現代俳句協会

秋季吟行俳句大会(予告)

日時 九月一日(日)午前十時受付
会場 富山市民プラザ三階 AVスタジオ
吟行地 富山城・富岩運河環水公園・松川べり
参加費 二句、千円
投句締切 十一時五十分
第十三回ジュニア俳句大会 表彰式
日時 十一月九日(土)
会場 富山県教育文化会館

俳人協会富山県支部 俳句大会(予告)

協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。
日時 九月二十三日(月・秋分の日)
会場 富山電気ビル 午後一時
講師 俳人協会評議員 「りいの」主宰 檜山 哲彦先生

5位⑥ ふくらんで届く封書や鳥の恋 石田阿畏子
⑥ 橋の名のみな美しき初桜 海野ふさ子
6位⑤ 応援旗引き継ぐエール初つばめ 跡治 順子
⑤ 初蝶来向ふから友来るやうに 漁 俊久
⑤ 満目の花菜一氣に鋤き込まれ 北川 秀子
⑤ いくさ無き平成逝かすくらかな 四宮 一子
⑤ 香眞師の子のひとり吐き出すしゃぼん玉 篠井 恵子
⑤ 強がりの胸かも知れず春の鴨 島田おたか
7位④ 風筋の見え梨棚の花盛り 浅野 義信
④ 普段着のままに来てゐる蜃気楼 水白津奈子
④ 啓蟄の土になじまず鎌の先 石工 冬青
④ 子らは手に頬に春野を持ち帰り 木谷 美以
④ 獣らに聞かすラジオや耕せり 石田 英子
④ 誰かれの視野をはみ出て蜃気楼 川上 弥生

講演要旨



身近些事を詠む
— 岡本眸の俳句 (要旨) —

「俳句会」代表 松岡隆子

○岡本眸の略歴

昭和三年一月六日、東京生まれ。富安風生・岸風三樓に師事、「荏葉」「春嶺」入会。昭和五十五年「朝」創刊主宰。第一句集『朝』で第十一回俳人協会賞。第四句集『母系』で第八回現代俳句女流賞。第十句集『午後の椅子』で第四十一回蛇笏賞、第四十九回毎日芸術賞受賞。平成六年紫綬褒章、十一年勲四等冠章受賞。句集は他に『冬』『一人』『十指』『矢文』『手が花に』『知己』『流速』。他に、自註句集、自選句集、入門書、エッセイ集など。

○岡本眸の俳句

岡本眸は昭和、平成を代表する俳句作家の一人である。

「朝」創刊以来一貫して「俳句は日記」を作句信条とし、日々の生活を大切にしながら、そこに生ずる哀歎の情を日記のように書き継いでいく。人生の真実は日常些事の中にあると言ひ、日常生活の中に潜んでいる詩の欠片を掬いあげ詠っていく。まずはその身辺詠の作品を見ていきたい。

障子白く平凡に朝は生まれり 『朝』
覚めてまだ今日を思はず白障子 『午後の椅子』

小鳥来る一人の家に飯噴いて 『母系』
飲食のことりことりと日の盛 『矢文』
木の芽雨睡らむと息整ふる 『朝』
知らずわが睡りの顔のただ寒く 『矢文』
朝起きて、食事をして、夜になれば眠る。誰もが行ってはいる当り前のこと、そのひと時ひと時に身を委ね自分の息遣いを確かめる。

一句目、目が覚めて真っ先に見えた白い障子、昨日と同じように今日があることと安らぎ。子宮癌の手術後一年、平凡な日常がしみじみ愛しい。
二句目、寒い冬の朝、暫し蒲団の温もりに身を委ねている、時が暫し揺蕩っているような、作者七十代の自愛の句。
三句目、「ちよとど、そのころの私は夫の三回忌を済ませ、独りなりに明るく生きねばと思ひ始めていた。」と自解している。(小鳥来る)の季語を得てそのささやかな決意が生きたと。
四句目、独りの昼食た、日盛りならでは乾いた孤独感が(ことりことり)に象徴されている。父親代わりだった長兄を亡くす。

五句目、寝付けない夜、木の芽雨が優しい。「三十四年三月、盲腸癒着のため一ヶ月入院」の前書きがある。六句目、眠っている自分の顔を客観視するもう一

人の自分、身を刺すような寒気の夜の寂寥感。
起きて、食べて、寝るということの平凡こそ、生きている真実であると眸俳句は語る。このような些細のことに詩を見出すには張り詰めた詩精神を要する。岡本眸はそれを生来持ち合わせている作家と思う。
更に眸俳句の身辺詠の世界を見ていくと、日常のそここに詩があることを教えらる。

炎屋のうしろ手つけば敷居あり 『母系』
秋風や柱拭くとき柱見て 『矢文』
傘干しに出て朝顔の種も採る 『』
年逝くと白轉車を押しながら話す 『手が花に』
迷惑をかけまいと呑む風邪ぐすり 『』
身のまはり手で掃いて冬深まりぬ 『知己』
ゆく春や椅子の一つに物横んで 『』
起ちあがるとき春めける畳かな 『流速』
手を擦って机辺離るる霜の声 『午後の椅子』
寝る前を低く唱へり冬の果 『』
初電車待つといつも位置に立つ 『』
些細な行為を詠みながら、ある句には深い哀感が、ある句にはそこはかない哀感が漂う。

作品の背景には次のような現実があった。
岡本眸は青春時代を戦中に過ごした。空襲による自宅の二度の焼失、三兄の戦死、その後両親の死、子宮癌の手術、夫の死、と次々と大きな不幸に襲われた。それら乗り越えながら、生きるとは何か、命とは何かを自問自答し、己を待み自らを励まし俳句に詠んでいく。自分を自分の周辺を俳句に詠むことが生きていく実感であった。

○岡本眸と富山
富山は岡本眸にとって第二の故郷であった。「朝」創刊には当時「喜見城」の主宰をされていた長沼紫紅氏と三津夫兄兄弟の貢献があった。
眸の代表句の一つである(雲の峰一人の家を一人発ち)は、「朝」創刊の決意に当たって、富山へ旅立つときに詠まれたものである。
昭和四十八年から平成九年まで岡本眸は十数回富山を訪れ句集に残した句は百句を超える。
また、魚津にへしばらくは戀めくこの唇氣樓の句碑が建立され、富山は眸門の私たちにとっても心の故郷となっている。

目つむりて己れあたたむ冬の旅
岡本眸がこよなく愛した富山の冬の浜で詠んだ一句をもって、拙い話を終る。

付記

○富山での吟詠十句
ねんねこや生れし日よりの日本海 昭和四十八年
別るるは寒しと汐木焚きはじむ 昭和五十六年
この町の漬菜と過ぎぐ山のいろ 昭和五十九年
月の面に風の彩ある風の盆 平成元年
はるばると来てさみしさを踊るなり
ここ来よと雪踏み呉るる男靴
夜焚火や闇より波の走り出づ
目覚むれば障子開くれば日本海 平成三年
はるかなるものを指しては踊るなり
さみしきの己れへ踊る手足かな 平成九年

平成 30 年度 収支決算報告

(単位:円)

Table with 10 columns: 科目, 予算額(A), 決算額(B), 差(B-A), 備考, 科目, 予算額(A), 決算額(B), 差(B-A), 備考. Rows include 会費, 過年度分会費, 助成金, 寄附金, 合同句集代金, 雑収入, 繰越金, and 合計.

(収支差額 229,247円は令和元年度へ繰越)

令和元年度 収支予算

(単位:円)

Table with 10 columns: 科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考, 科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考. Rows include 会費, 過年度分会費, 助成金, 寄附金, 合同句集代金, 雑収入, 繰越金, and 合計.

消 息

○富山県現代俳句協会は平成三十一年度総会、及び春季俳句大会を三月三十一日(日) 県教育文化会館にて開催。出席六十三名
天位 峡という大きな器雪しんしん 八尾とおる
地位 落葉焚く父を叱りて泣きたき日 平野ともみ
人位 風紋は母の文かも春渚 山下久美子
役員石川たかね理事退任につき金山美恵子氏を新理事に就任。
○第29回北陸現代俳句大会を五月十二日(土) 金沢ニューグランドホテルにて開催。北陸三県より参加。講師は現俳協特別顧問、宮坂静生先生。
県内関係者の入賞
二位 東京駅から罫雲に乗り換える 小池 弘子
三位 信長の首抱え来る老菊師 坂田 直彦
○第二回となみ野俳句大会を令和元年六月九日(日) 砺波市文化会館にて開催。参加者七十名
中坪達哉県俳句連盟会長選
天位 樗茂る手摺の増えし生家かな 押見南美子

地位

遠き日のかくれんぼの鬼かげろへり 上田 恭子

人位

新緑の庭を巡るや法事客 森田 和子
帰る鳥見送る子等の指眼鏡 寺島 皎
万緑や呼吸とのへ納骨す 飯田 静子
子に託す田や平成の名残雪 吉田萬里子

受 賞

とやま文学賞 石灰 潤子

句集出版紹介

みのり俳句会合同句集第13号 平31・3
城端俳句協会会誌第二十五号 平31・3
パソル句会「海へ」 平31・3
「寒潮」三百句記念合同句集 平31・3
西吾句集 泉西吾 合元・6

第38回 とやま文学賞 作品募集

俳句 未発表句 二十句
(B4四百字詰原稿用紙を使用)
締切 令和元年九月末日
送付先 〒930-0096 富山市舟橋北町七一
(株)富山県芸術文化協会事務局
(とやま文学賞)係宛

編集後記

連盟会報88号をここにお届け致します。次回89号は令和元年十一月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、原稿用紙記入の上、左記に送付下さい。(郵送又はFAXのみ)
〒九九一八一 南砺市理休二二六
川井 城子
FAX・TEL(七五) 六二二三〇八